

青森を「具にみる」

アートの現場から

ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）では、5月中旬から写真家・アーティストの松本美枝子さんを招き、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）を実施しています。今年度に断続的に計3カ月の滞在制作を行い、来年度の春に新作発表を予定しています。滞



出来島最終氷河期埋没林（つがる市）でのリサーチの様子

本さんは青森でも地層と人の関わりをテーマに、遺跡から産業まで幅広く対象にリサーチを開始しました。青森の地元の方や地質学に関わる研究者など、様々なお話を聞く中で、彼らも口にする地質学と芸術の共通点を気づかれます。それは、よく観察し、分析するという点です。例えば、地形の成り立ちを観察し、地層の状態を見て自然の歴史を推し量る時、見えてくる形状や材質から分析し、さらには、その部分から見えていない部分も推測する際、そこには想像力が伴うのです。美術における想像力も近い部分があります。現代社会における問題を思考し、言葉で表せない連関をビジュアルやサウンドを通して作り上げ、鑑賞者の記憶や経験・思考から発生する想像力を引き出します。科学と対照的に作品で呼び起こされる思考は、大きな飛躍を生みますが、知覚したものから推測するという想像力の点では広い意味で共通しています。考

古学において、発掘された縄文土器の模様から制作の方法を推測することがありますが、その起点になるのは、縄文人と現代人が共通して持っている身体と言えらるでしょう。これらは過去の歴史をよく見ることで生まれる未来に向けた想像力でもあります。芸術もまた、作品という言葉ではない方法で共に議論する場をもたらす、科学と同様に未来への想像力の多様性をもたらしてくれるものだと言えるでしょう。

松本さんはこれまで数多くの写真のワークショップの講師も務めています。青森ではACCACのフォトスタジオを活用してカラープリントを行う「ACCACの写真部」を発足させました。写真の撮影方法もバラバラですが、互いの作品を見せ合いながら、意見交換を始めることになりました。この活動を通してまた、自分たちが見ている世界を「具にみる」ことになるでしょう。

願いを込めて「具にみる」というタイトルを掲げて歩き出しました。松本さんは近年、拠点である茨城県の土地の歴史からリサーチ過程で出会った人の個人史までを重ね合わせ、人の時間のスケールを超えた物語を紡ぐような作品を発表しています。松

（青森公立大学国際芸術センター 青森学芸員 村上綾）
※第1金曜日掲載